

いぬはりにこ

文化事業
特集号

vol.

12

心を育む園づくり

子どものころから
ホンモノに出会う。
感動とふれあう日々が
人間力を育みます。

文化作品のある風景

園児たちを迎え入れる
気品の像「春風の調べ」

心の中にやさしさ満たす
一枚の絵「コスモスの詩」

星野はるかの手作り工房

毎日が楽しい!
くまさんのお知らせボード

Creator's voice

中村晋也インタビュー

作品づくりは、作品を
考えること。
内なる心と向き合う、「祈り」の造形



Creator's voice
中村晋也 インタビュー

作品づくりは、 作品を考えること。 内なる心と向き合う、 「祈り」の造形

60年を超える制作活動を通して、具象彫刻を追及し続ける彫刻家・中村晋也先生。内なる精神や人格を具象の像として表現した作品を数多く発表し、2007年には文化勲章を受章されました。鹿児島市にある財団法人中村晋也美術館と中村先生のアトリエをたずね、作品への思いをうかがいました。





真剣な眼差しで彫刻制作に取り組む中村先生。精緻なディテール表現だけでなく、人物の存在感を見事に描き出していく。

鹿児島ので地 彫刻を広めたい

——三重県ご出身の先生が、作品づくりの拠点を九州・鹿児島にしたのはなぜでしょう。

昭和24年に東京高等師範学校（現・筑波大）を卒業後、辞令によって鹿児島大学に勤務することになったのが、鹿児島との縁の始まりです。当初は、こんな長く滞在するつもりはなかったのですが、私を信頼してついてきてくれる人たちが増え、彼らをきちんと育てたいと思っているうちに、10年、15年と年月が過ぎ、自分なりの地場ができました。鹿児島の芸術は、もともと油絵が盛んで、彫刻はあまり浸透していませんでした。大勢の仲間や弟子たちといっしょに、なんとかこの地で彫刻を広めたいという思いから、鹿児島を制作の本拠地にしようと決意しました。

——先生の少年時代について教えてください。

小学生時代は満州事変に支那事変、旧制中学時代は大東亜戦争、大学時代は軍隊へ、そして終戦。青春時代のほとんどを戦争とともに歩んできました。今でも、幼児教育という分野が確立していませんが、当時は幼稚園や保育園がないので、小学校に入る前は、親が教育するもの。裁縫をしている母のそばで読み書き、ソロバンを教えてもらい、入学前に九九はもちろん、二年生くらいまでの勉強がで

きているのは当たり前でした。昔は、点数によって席次が決まっていたから、みんな一生懸命に勉強します。競争意識があることで、人間は繁栄し、成長してきたのでしよう。今の子どもは昔の子に比べて自分に自信がなく、精神的にも体力的にもひ弱になっているのを感じます。昔みたいに、競争意識を持たせることも教育には必要なのかもしれません。

頭の中で構想が決まれば、 手や体が自然と動く

——先生の心の中に存在するテーマとは何でしょうか。

長年に渡って、私は「神とは何か？」「仏とは何か？」「人間とは何か？」を考え続けてきました。伊勢神宮のお蔭元で育つたのに、私はその答えを知りません。神様に生ものを、仏様には煮たものをお供えする理由や、参拝するときの作法の由来がわからなくてもよしとしている私たちとは何だろう、と疑問に思うのです。このテーマに沿って、皇大神宮の神職の方をお招きした講演会を開くなど、さまざまなアプローチを続けているところで、答えは簡単には出ませんが、これからも作品づくりなどを通して、追求していきたいと思っています。

——一つの作品を作り上げる期間はどのくらいでしょうか。

作品ごとに違いがあるので、一概には言えませんが、作品を作るということは、作品を考えることです。一つのテーマが

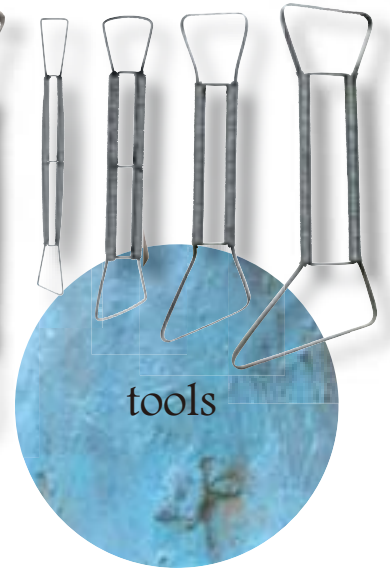


Profile

中村晋也 Shinya Nakamura

1926年、三重県に生まれる。49年に鹿児島大学着任。66年から二度にわたりパリに留学し、彫刻家アベル・フェノサに師事。79年『大久保利通公』『若き薩摩の群像』など鹿児島県内外に大型モニュメントの制作。88年に『朝の祈り』で日本芸術院賞受賞。89年に日本芸術院の会員に。96年にパリで『中村晋也展』開催。2003年に奈良・薬師寺に『釈迦十大弟子像』を安置。07年に文化勲章受章。





中村先生が彫刻に魂を吹きこむ制作道具。大小さまざまな形状のツゲベラ、カキベラなど。★は先生がいちばん気に入っているヘラ。使い勝手がよいものは使用頻度が高いので、すぐに磨り減ってしまう。先生のお弟子さんも先生愛用のヘラが一番使いやすいと言う。技術を持つ人が使いこんだ道具はとても使いやすくなるのだそう。

出てくると、対象について1ヶ月〜2ヶ月ほど自分の中で心を向け、じっくりと構想を練ります。「実際にこういう作品をつくらう」と、思いを致す時間、この時間がとても大切です。歴史的な人物がモチーフの場合は、できる限りの資料を集め、研究することから始まるので、さらに時間を要します。たとえば、当美術館にある『島津義弘』騎馬像では、粘土制作は1年ですが、資料集めなどの準備期間を入れると完成までに計3年かかりました。構想が決まれば、すでに心の中では作品ができあがっています。60年も彫刻を続けているので、そうなれば自然に手や体が動いていきます。

突き動かされる「折り」への思い

現在は、どのような作品を制作中ですか。

宮城県の方からの依頼で『片倉小十郎』の制作に取りかかっています。一人の英雄を自分の中でどのように消化して、作品を仕上げていこうかと考えながら仕事をしています。歴史上の人物の場合、自分が像をつくることによって、顔立ちのイメージができあがってしまうので、どのような顔にするか、さまざまな資料を参考に、慎重に決めていきます。

60年もの活動期間で、作品づくりへの思いや考えは変わってきましたか。

50代には50代の、80代には80代の考え方があり、その年によって考え方はちが

います。しかし、子ども時代からの戦争体験や1995年の淡路大震災などを通して突き動かされた、折りや鎮魂をテーマとする思いは今も変わりません。また、何歳になっても、仕事をさせていただけるととても楽しく感じています。仕事がいやだと思ったり、それで終わりですからね(笑)。

もっともっと勉強したい

彫刻家として、これまでの人生をどう思われますか。

人生というものが、これまでどのくらいみなさんのお役に立てたのかを問われるものだとしたら、私は鹿児島に本拠地を置き、鹿児島に彫刻を広め、いろんな人たちを育てることができて、少しは役に立てたのではないかと思っています。

実は、私が卒業した旧制神戸中学校(現・三重県立神戸高校)で、昨年の四月に「70周年記念入学式」が行われ、私たち昭和19年卒業の同級生が集まり、再入学式に出席しました。5年制なので、卒業時には88歳。どうせなら本気で勉強しようと考えて発案した計画です。卒業生のうち、すでに亡くなった方も多いですが、久しぶりに仲間たちと会い、一緒に勉強しようという語り合えて、とてもうれしい時



小学校生活で自信を持てる子どもに

「いぬはりこ通信」を読まれている幼稚園・保育園の先生方にメッセージをお願いします。

私は長い間大学で教鞭を取ってきましたが、これまで幼い子どもの教育現場に携わった経験はありません。ですから、あまり意見を言わせていただく立場ではないのですが、生まれてからまだ数年の子どもたちに何かを教えるのは、本当に特別な仕事ではないかと思っています。そこには親と同じくらいの「愛」がなくてはならないと思いますが、同じように小学校の前教育としての期待もされていると思います。幼稚園や保育園がない時代には、親だけが担っていた教育やしつけを子どもたちにきちんと行き渡らせ、小学校生活を自信をもって送れるようにすることが、大切なのではないかと思います。



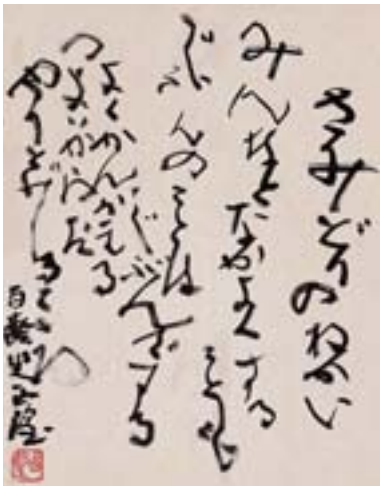
中村先生が生み出した作品のかずかず。『虹のむこう』(左上)と『たからもの』(左下)は、それぞれ少年と少女がモチーフ。子どもらしい頬のふくらみや、愛らしい表情がいきいきと表現されている。一方、武将の勇姿を再現した『菊池武光公』(左中央)では、当時の資料をもとに、どんな鎧・甲冑をまとっていたのか丹念に調べて制作。外側からは見えない甲冑の裏側にもこだわり、精緻を極めた逸品。鹿児島県中央駅前の『若き薩摩の群像』(右中央)は、薩摩藩英国留学生がテーマの大作。福井県・良覚寺の『釈迦十大弟子像』(右下)は、2003年に奈良・薬師寺に安置した作品よりサイズは小さいが、その研ぎ澄まされた空間に圧倒される。



子どものころからホンモノに出会う。 感動とふれあう日々が 人間力を育みます。

創造性や倫理観、教養など、人格の基礎となる部分は、幼児期に形成されます。
より文化的で、教育的に優れた環境をつくってあげたい。

幼児期に“本物”に触れた経験が子どもに与えるに影響について、代表の徳本道輝はこう考えています。



徳本代表が提唱する幼児教育の指針（左）は、北村西望先生による書。2009年「ジャクエツ・コレクション展」に展出した、横山大観作『巒雲表』（中央）。富永直樹作のブロンズ像『初舞台』は01年、福井県立音楽堂に寄贈。

子どもの環境に芸術品を

ジャクエツの創業は大正5年。現在、全国の幼稚園・保育園数は数万カ園ですが、当時は約500カ園ほどでした。先代はもともと浄土真宗の出雲路派に属する小さな寺の住職でしたが、地域社会との連携を企図して、幼稚園を作りました。戦前は幼稚園の教材が不足していたことから、当グループの事業として、次第に教材の作成や環境づくりにも力を入れるようになり、現在に至っています。

長年に渡り幼児教育に携わってきた私どもは、ハサミやクレヨンといった消耗品として効果が見える教材と同時に、「存在することによって、教育効果上がる教材があると考えています。それが、優れた芸術家の彫刻や絵画作品などを中心とした、ジャクエツ「文化事業」を立ち



北村西望先生による彫刻『笑う少女』。愛くるしい表情を見せていると、子どもも大人も思わず笑顔になってしまう。

上げた理由です。従来、子どもの教育は自然の流れという発想が主流でしたが、私どもは幼児期に、より文化的で教育的に優れた“本物”に触れることが、人間の資質を育むうえで、とても大切だと考えています。

三つ子の魂百まで

私どもの幼稚園では、3歳で入園テストをしますが、3歳といえは、生まれてからまだ1000日目。しかし、1000日もたてば、いくつかの質問のやりとりなどを通して接するうちに、その子の資質は、ほとんどわかってしまうもの。つまり、環境が子どもに与える影響はそれほど大きいということです。「三つ子の魂百まで」というように、幼児期の環境はその後の人生に大きな影響を与えます。だからこそ、子どもの教材や玩具は



第二早翠幼稚園の玄関ホールに設置された彫刻や立体作品は、いつも子どもたちに大人気。触ったり、話しかけたり、芸術品を身近に受けとめ、接している。

それだけ本物志向でなければならぬと、私どもは確信しています。

園に芸術品を置くことについて「子どもたちをどのよう教育すれば壊したりしないのでしょうか？」とよく聞かれます。そんなとき私は「普通にしていればよいのです」と答えます。特別な指導がなくとも、子どもは芸術品と友だちになれる感覚を持っています。私どもの幼稚園でも実際に試してみました。設置から十数年来、事故はこれまでまったくありません。大人が「これはいいものだ」ときちんと話して聞かせれば、子どもたちは決して悪さをしないものです。それどころか「○○ちゃん、おはよう」と、まるで自分の大好きな人形に話しかけるように、親しみをもって接しています。

感動を社会還元するために

企業は本来、社会とともにあるもの。「文化事業」は、社会に還元する思想を持つとういう視点から生まれました。

今から26年前、あるご縁から、長崎の平和祈念像を制作された、文化勲章受章者の北村西望先生を紹介していただきました。当時100歳でいらつしやった北村先生は足の具合が悪く、車椅子で生活されていたのですが、アトリエでお弟子さんたちの助けを借りながら、変わらずぬ熱意と志をもって彫刻の仕事が続けてい

らつしやる。その姿を目の当たりにした私は、先生の生き様に驚くとともに、この感動を、すべての人に差し上げなければと、胸を熱くしたのです。

本物に触れて育つ力

優れた芸術家は、技術を磨き、自分自身の人間性を高めながら制作に没頭することにより、人の心を感動させ、後世に残る作品を生み出しています。そのような作品に、たとえ子どもでも、影響されないはずがないのです。幼いときから本物の芸術品に接することのできる環境。すばらしい作品に触れ、感じながら成長することは、その子の人間力を育むことにもつながると信じています。

(ジャクエツグループ代表 徳本道輝 談)



長崎・平和祈念像を制作した日本彫刻界の巨匠、故・北村西望先生(右)と握手を交わす、代表の徳本。

園児たちを
迎え入れる

気品の像

学校法人戸井田学園
伊奈はなぞの幼稚園様

「先生おはよう」「○○ちゃん、おはよう」。伊奈はなぞの幼稚園の玄関で交わされる、朝の爽やかな挨拶。そには、中村晋也先生の彫刻作品『春風の調べ』が佇んでいます。「たおやかで美しく、気品を感じる作品。園児たちを迎え入れる玄関だから、この像を置きたいと思った」と話す、園長先生。この作品と出会ったのは、展示会がきっかけ。「ひと目で作品のすばらしさを実感しました。その後中村さんの美術館でご本人とお話しする機会をいただき、ぜひ園の子どもたちに感動を伝えたいと思ったのです」。像を設置するときに大切にしたのは、園児の目線に合わせてること、触れられること。「子どもは、園の一部のような感覚で、自然に芸術作品を受けとめているよつです」と微笑む、園長先生。豊かな芸術に包まれる、園児たちの生活は、教育目標でもある、「美しい、豊かな、強い心」を、静かに、じつくりと育んでいます。

文化作品の ある風景

優れた芸術家の作品を、
子どもたちの生活環境へ。
見て、触れて、感じながら、
子どもたちの心は、大きく羽を広げます。
彫刻、絵画のある、
園の風景を訪ねてみました。





心の中に やさしさ満たす 一枚の絵

社会福祉法人
さわらび福祉会
野菊野保育園様

玄関前には赤や黄色の花々、園庭を包みこむ緑豊かな木々、オレンジ色の日差しがあふれる教室やホール。野菊野保育園のあちこちで出会う、カラフルな色。なかでも子どもたちのいちばん人気は、玄関の壁を彩る大きなピンク色の絵画です。タイトルは『コスモスの詩』。童画作家・宮沢晴子先生の作品で、バリの展覧会にも出品した、海外の評価も高い傑作。「園の保育目標は、知育、徳育、体育のバランスのとれた人間形成をめざすこと」と語る園長先生。書道や茶道を学び、お年寄りとの交流、朝礼時には正座をするなど、さまざまな取り組みをしています。「よい絵を毎日眺めていると心が穏やかになり、やさしい気持ちになれるでしょう」園長先生の言葉どおり、子どもたちの笑顔もほんのりピンク色。みんなの心の種は色あざやかにすくすく成長しています。

毎日が楽しい! くまさんのお知らせボード

見ているだけで思わず笑顔になってしまう。
やさしさと愛情いっぱいの作品で、子どもたちに大人気の
童画・造形作家の星野はるかさんに、プリントソフティー不織布3を使って、
すてきなお知らせボードを作っていただきました。

くまのほか、うさぎやニコリ笑った太陽なども、かわいらしい仕上がりになります!

お知らせを書いた紙を、入れ替えて使えます。市販されているホワイトボードを使うのもアイデアです。

2枚の不織布を重ねて使います。下の不織布を濃い色にすると、上の柄が目立って、とてもきれい!

壁に貼っても、三角の支えを裏側に貼り、立てて使ってもOK!





〈用意するもの〉

プリントソフティー不織布3(雪の結晶/水色)、ソフティー不織布(青)、カラーなみだんセット、フェルト、グロリアモール



1

台紙をつくる

カラーなみだんを2枚合わせて、上下の部分を写真のように折り曲げ、ボードの台紙をつくります。



2

不織布を重ねる

プリントソフティーをソフティー不織布と重ね合わせて、銀箔と逆の部分をしきつ折り、プリーツをつくります。



3

カーテンをつくる

②で重ねた不織布を、①の台紙の左右に貼り付け、中央をフェルトでとめカーテンをつくります。



4

台紙を固定

台紙のカーテン付近4ヶ所に穴を開け、グロリアモールを通して、台紙がずれないように、しっかり固定します。



5

くまさんを貼る

あらかじめ用意しておいたくまを台紙に貼り付ければ、かわいいお知らせボードのできあがり!

透明感のある、とてもかわいらしい素材ですね。濃い色に淡い柄を重ねて、壁面装飾やのれんなど、柄を活かした手づくりに最適だと思います。おしゃれな両端の加工を活かして、キャンディーネックレス(右)も作ってみました!

プリントソフティー不織布3でキャンディーを包み、1つずつモールでしばる。輪にしてリボンをつければ、キャンディーネックレスに!



星野はるか

Haruka Hoshino

1981年、埼玉県出身。中央美術学園卒業、スタジオ・くま所属。幼児出版を中心に、イラストや造形に携わる。スタジオ・くまの造形教室、お絵かき教室などで活躍中。



プリントソフティー不織布3

セット：¥21,000(税込)

バラ：¥2,340(税込)

サイズ：幅96cm×長さ5m巻

材質：ポリプロピレン

内容：さくらんぼと水玉2色、花2色、クローバー2色、雪の結晶2色、星とストライプ1色 計9本セット



いろんなシーンで大活躍!

レースのように、上品でかわいらしい不織布セットです

●薄手の不織布に、さくらんぼや星などの柄が淡く印刷されており、ふちはフリルや金・銀箔入り。

●発表会の衣装や、テーブルクロス、カーテン、壁面装飾、保育室の飾りつけ、プレゼントの梱包、作品の装飾など、さまざまな用途に使えます。



12ヶ月の色あざやかな季節を、
あふれんばかりの満面の笑みの子どもたちが、
いきいきと過ごしている様を描いたシリーズです。

「笑顔のおともだち」といっしょに
子どもたちの季節が、ほほえみで溢れますように。



笑顔のおともだち

星野はるか 6号作品

12ヶ月セット ¥1,890,000(税込)

1枚のみご購入 ¥210,000(税込)



ジャクエツ

www.jakuetsu.co.jp